

カナダからの便り

「カナダ・カルガリーでの暮らし」

東京聖マルチン教会 太田 道子

この三月からカナダはカルガリーでの生活がはじまりました。カルガリーといえば、一九八八年に冬季オリンピックが開かれた地として有名で、それくらいしみなさん思い浮かばないのではないのでしょうか(私もそうでした)。それ以降に生まれた若い人にとっては、それさえも知らず、「そこどこ？」という感じのようです。母には「畑を耕して生活するのか」というようなことを言われ、思わず苦笑してしまいました。

あまり知られていないカルガリーですが、じつはカナダで四番目に大きい、電車もバスも行き来する(一応)都市で、ロッキー山脈の玄関口として知られています。石油を中心に、資源が豊富で経済的にうらおっているため、カルガリーのあるアルバータ州の消費税は5%と他の州に比べて格段に低く、生活者にとってはかなりありがたい土地でもあります。車を少し走らせると、見事な山々が広がり、都市と自然のバランスが心地よく感じられます。バスに乗れば気軽に「おはよう！」と声をかけあい、降りるときには「ありがとう」「いい一日を！」と挨拶。乗り遅れている人がいれば、バス停以外でも乗せてあげる。どこかのんびりとした雰囲気、これまであくせくと時間に追われて働いていた私にとっては、なんとも別世界な環境です。

こちらに来てあらためて驚いたのは、様々な人種であふれているということ。通じる英語を話さなくては…と気構えてドキドキしていましたが、英語が話せない人がいるのは当たり前だと住んでいる人はよく理解していて、こちらがドキマギしていても寛容に受け止めてくれます。それに、わからないと伝えれば、ていねいに説明してくれるので、生活するうえでの言語の不慣れさは思ったよりも感じていません。

また、こちらはさまざまな国の料理であふれています。日本食レストランも多く、家の近くのラーメン屋さん、いつも行列。巻き寿司もスーパーで売っています。しばしばカナダの文化は「モザイク文化」と表されますが、無理にこの土地に溶け込ませて同化させるのではなく、互いの文化を尊重しあい、認めあう、つまりはひとつひとつの文化が一枚のタイルで、大きなモザイク画のような絵を作り出しているというようなことだと思います。こちらにきていっそう、その意味が理解できたようです。

先日、近くの教会に足を運んだところ、最初の聖歌が「Stand up Stand up for Jesus」との歌い出しで「お～これは！」とうれしくなりました。父の大好きな聖歌、「立てよ、いざ立て」でした。とても懐かしく、カナダでもこの曲に出会えたことに感激しました。英語で行われる礼拝ですが、基本的に流れは同じ。子供のときから通っているマルチンとつながっているようで、少しほっとしたと同時に、みなさんの顔が浮かびました。四月のはじめ、イースターのメッセージとともに、母から「マルチンの礼拝は三月で終わりました」と連絡を受け、無性にさみしくなりました。それでも、目をつむればマルチン教会での様子が浮かびます。きっと忘れることはないと思います。

来てもうすぐ二カ月半ですが、支えてもらいながら、こちらの生活にも慣れてきました。ぜひ機会があれば、カナダはカルガリーまでお越しくださいね。お待ちしております！そして、秋にみなさんに会えるのを今から楽しみにしています。 完

東京聖マルチン教会 教会報「堅琴」第173号より